

【第11回大黒屋現代アート公募展・對木裕里展によせて】

終わりなき越境を

この人の意識の中には、さまざまものが渦巻いているようである。作品化されているものは、存在や知覚世界の、いふなれば見えたり感じられたりするものを実にダイレクトに作品としてだしている。とって、ひとつひとつの作品がどのような根拠によるものなのか、タイトルを見ると何なのかわかるというのも、この人の作品の特徴である。実にわかりよいタイトルである。ウラもオモテもない感じである。つまり、この人は知覚世界をそのようなスタンスでとらえているのであろう。すべてを等距離でとらえるという状態は、線引きのない状況であり、意識がアッチへいたりコッチへいたりして、〈ここが私の領土よ〉という認識が薄いことを示している。このような在様をいうならば、この人の思考の動向は「越境的」なのである。アチコチに「越境」して、自分の勢力を広げている様態である。このような立場にいれば決して作品ができなくなることはないであろう。

菅 木志雄